

## 小学校英語における音声の指導

### —モデルの復唱で身に付くことと身に付かないこと—

石原 知英\*・日高 佑郁\*\*・高味 淳\*\*\*・濱崎 孔一郎<sup>+</sup>・金崎 英俊<sup>++</sup>

(2020年10月21日 受理)

## On Teaching English Pronunciation in Elementary School: Effects and Limitations of Word Repetition

ISHIHARA Tomohide, HIDAKA Yuka, TAKAMI Jun, HAMASAKI Ko-ichiro, KANESAKI Hidetoshi

### 要約

本研究では、日本語にない英語特有の音声要素を持つ (1) カタカナ語と強勢位置が異なる語、(2) 子音結合などによってカタカナ語と音節数が異なる語、(3) 日本語にない母音 /æ/ を含む語、(4) カタカナ語で長母音に代用される二重母音を含む語が、(a) モデル音声のあとに正しく産出されるか、(b) モデル音声なしで正しく産出されるか、(c) モデル音声なしで文字を見て正しく産出されるかを調査した。小学5年生の児童33名を対象とした実験の結果、モデル音声を復唱するときには正しく発音できる単語であっても、イラストを見て自律的に発音したり、綴りを見て発音したりする際には、その正確さが失われる可能性があること、またこれらの音声要素の中では特に二重母音の音声認識が難しいことが明らかとなった。したがって、音声の指導としては、モデル音声をリピートするような活動に加えて、カタカナ語として定着している単語に留意し、両言語の音声の違いに気付けさせることが必要であると結論づけた。

**キーワード**：小学校英語教育、音声指導、語彙習得、発音

\* 鹿児島大学法文教育学域教育学系 准教授

\*\* 鹿児島大学共通教育センター 助教

\*\*\* 鹿児島大学法文教育学域教育学系 准教授

+ 鹿児島大学法文教育学域教育学系 教授

++ 鹿児島大学教育学部附属小学校 教諭

## 1. はじめに

2017年に告示された新しい小学校学習指導要領では、中学年を対象とした外国語活動の目標を外国語への慣れ親しみとした上で、高学年を対象とした外国語科においては、コミュニケーションを図る基礎を育成することを目標とすることが示された(文部科学省,2017)。具体的には、「知識及び技能」に関連して、「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする (p. 69)」として、中でも音声の学習に関連する事柄について、日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、特徴についての気付きを促す指導が求められている。つまり、音声の指導に際しては、現代の標準的な発音、音の変化、強勢(アクセント)、イントネーション、文の区切り等について、音声に十分に慣れ親しませながら、日本語との対比においてその特徴に気付かせることが重視されている。文字を示しながら音の変化や発音と綴りの規則を指導すること等の明示的な指導は中学校段階で行うことが強調されているが、小学校段階においても、例えば母音や子音の種類や数が英語と日本語では異なっていることや、英語では子音が続いたりすること等の基本的な特徴については、英語音声に慣れ親しむ中で身に付けさせていく必要がある。

## 2. 先行研究

### 2.1 小学校英語における音声指導の実態と課題

上述した学習指導要領の指針を基に、現状の小学校での音声の指導は、多くの場合、歌やチャンツ、音声モデルを繰り返しリピートすることを通して、児童が自然と日本語音韻と英語音韻の違いを認識し、その音声を実際に正しく発音できるよう促すことが主流となっている。しかしながら、こうした復唱を中心とした指導方法は、学習指導要領改訂以前から行われてきた指導と大差なく、また児童が日本語音韻を代用したまま活動に参加することなどの課題も指摘されている(和田, 2016)。つまり、モデル音声の単なる復唱だけでは、学習指導要領の目標に示される英語特有の発音に関する気付きが促されず、英語の音声を正しく習得することができない可能性がある。この懸念については、旧学習指導要領下での指導が行われていた段階から様々な研究者が言及しており、例えば市崎(2009)は、小学校での音声指導について、発音や聞き取りへの抵抗感の軽減には寄与するものの、音の脱落や連結等の英語特有の音声の習得が不十分となることを指摘している。また、これまでの小学校での英語指導では、児童が英語を聞いたり発音したりすることに慣れてきてはいるものの、正確な発音を習得しているかという点に関しては十分に検証されていないという指摘もある(和田, 2015)。

単語の発音に焦点を当てると、音声モデルをリピートすることで最終的に正確な発音が習得されるためには、まずモデルの音声を正しく認識し、モデルのように正しく産出することが前提である。

そして、この認識と産出を繰り返していくことで、モデルなしでの正確な発音が可能になると考えられる。日本人英語学習者にとって習得が難しいと思われる英語特有の音声要素が、音声を聞いただけでどの程度正しく認識され、正しく産出されるのかについては、非単語反復課題を用いて検証した研究が盛んに行われている。例えば、単語の音節数の増加に伴い、音韻認識が困難になったり、子音連結が増えると、音韻認識には影響がないものの、産出が困難になったりすることなどが明らかになっている（高木・佐久間、2017；佐久間・高木、2019）。これらの研究は、言語性短期記憶に着目し、非単語を利用して検証したものであるため、長期的な観点から音声为正しく習得されるかについては言及されていない。

一方、教室において一斉指導の場面でモデルをリピートさせるときには、個々の児童がどの程度正確に復唱しているかを確認し、指導することが難しいという状況もある。また、モデルの音声を復唱させた場合に正しく認識・産出できていると思われる単語についても、ペアワークやスピーチなどの場面で児童が自律的に発音する際には、うまく発音できていない様子も見受けられる。モデルの復唱を通して、どのような音声要素が正しく認識され、産出されるか、また、長期的に習得されるかを段階的に検証することで、日本人学習者がどの音声要素にどの段階でつまづきを感じやすいのかを把握することができ、適切な指導の手立てを行うことができると考えられる。

また、モデルを提示した時には正しく認識し、産出できるにもかかわらず、モデルなしでは正しい発音ができなくなる理由の一つとして、ローマ字表記の影響が考えられる。大井（2009）の中学一年生を対象に行った調査では、単語テストにおいてローマ字や、単語のカタカナ読みに起因する誤りが多く見られた。これは、ローマ字の知識が単語のスペリングや発音に影響を与えている可能性を示唆している。新学習指導要領では、小学校高学年で英語の文字を導入することとし、既出の単語等の発音と綴りを関連づけて指導をすることが必要とされているが、この段階では既にローマ字の学習を終えているため、ローマ字の規則が英語の読みに影響を与え、その結果、文字の導入以前は可能であった正しい発音が阻害される可能性がある。

## 2.2 日本人学習者にとって習得困難な英語の音声要素

日本語を母語とする学習者が英語の音声を身に付けようとするときには、両言語の音韻体系の違いが影響を与える。つまり、英語音声を習得する際、日本語を母語とする学習者にとって習得が難しいと考えられる音声要素がある。本研究では、それらの中でも、英語のアクセント、音節、単母音、二重母音という4つの要素を取り上げ、調査を行うこととした。

1つ目の要素はアクセントである。英語は強さアクセント（stress accent）であるのに対して、日本語は高さアクセント（pitch accent）である（窪菌・本間, 2002, p.30）。したがって、日本人学習者は、英語の単語を発話する際に語強勢（word stress）を置くことに不慣れであることから困難を感じる事が予測できる。また、カタカナ語として定着している語と原語である英語のアクセント位置が異なる例も多く（例えば banana と「バナナ」など）、馴染みのある語ほど正しいアクセントで発

音することが難しい可能性がある。

2 つ目の音声要素として、音節構造の違いがある。英語は強さアクセントを示す言語であるが、英語のリズムという観点からは、強勢部分が等間隔に現れる強勢拍リズム (stress-timed rhythm) であるのに対して、日本語はモーラが同一の間隔をもつモーラ拍リズム (mora-timed rhythm) であるとされている (窪菌・溝越, 1991; 窪菌, 1998; 窪菌・本間, 2002)。したがって、たとえば今回扱った例でいうと、英語の *spring* の場合は母音が 1 つしかなく単音節として処理すべきだが、カタカナ言葉で「スプリング」と発音する場合には、5 モーラと認識して発音することが予想される。実際、赤塚・山見 (2016) の小学生を対象にした語頭子音の発音に焦点をあてた研究においては、*green* や *grapes* などの単音節の単語に母音が挿入されて 2 音節になってしまう現象が指摘されている。

3 つ目は、音節の核 (nucleus) となる母音の中でも、英語にあつて日本語にない母音 /æ/ の発音を取り上げる。この母音は、調音位置 (place of articulation) の観点から見ると前舌低母音となるが、日本語にはこの位置の母音がない。したがって、英語を発音するときには、近い音として中舌低母音の /a/ の発音を代用することが予測される。赤塚・山見 (2017) の日本人大学生を対象とする音素認識に関連する調査でも、日本人大学生には /a/ と /æ/ の母音を認識することが特に困難であることが明らかになっている。

最後に、英語の二重母音 (diphthong) を取り上げる。英語の二重母音を構成する各母音は、音節上切り離すことができず、単一の音節を構成するものと分析されるのに対して、日本語の場合は 2 つの音素からなる母音連続として捉えられる (窪菌・本間, 2002, pp. 13-15)。英語にはいくつかの二重母音があるが、その中でも今回は /ei/ と /ou/ を検査対象とする。この 2 つの連続する母音は、日本語の場合、2 つの形態素をまたがない限り、同化 (assimilation) を起こし、長母音となりやすい (cf. 平気、警視、英語、高校、道路、方法)。このような音声上の特性に加えて、高桑 (2012) は、英語のカタカナ表記やローマ字の学習が二重母音の音声の習得に影響を及ぼす可能性も指摘している。例えば、*boat* という語がカタカナで「ボート」と表記されることや、オ列長音を表すローマ字表記 (o, oh, oo, ou) がすべて「オー」と発音されることなどから、二重母音と長母音の区別なく発音される可能性がある。

これらの英語特有の音声要素は、日本語の音声体系との違いから、モデル音声のリピートのみで習得を促すのは難しいと考えられる。実際、熟達度の高い英語学習者であっても、しばしばこれらの音声要素のエラーがみられる。しかし実際のところ、モデルを正しく復唱する時点で問題が起きているのか、あるいは音声の認識と産出には成功しているものの、その後何らかの要素が習得を阻害しているのかが明らかでない。したがって、これらを段階的に検証し、どの時点で困難に直面しているのかを明らかにしたうえで、指導上の手立てを講ずる必要がある。

以上の音声指導の実態や課題を踏まえ、本研究では、日本人英語学習者 (小学校 5 年生) が日本語とは異なる英語特有の音声要素 (アクセント、音節、単母音 /æ/、二重母音 /ei/ /ou/) を (1) モデル音声のあとに正しく産出することができるか、(2) モデル音声なしで正しく産出することができるか

るか、(3) モデル音声なしで文字を見ながら正しく産出することができるか（音声産出が文字からの干渉を受けるか否か）を調査することとした。

### 3. 方法

#### 3.1 研究課題

本研究では、これまで外国語活動等を通して英語の音声に親しんできた小学生が、語彙の音声をどの程度正確に習得しているかを実証的に明らかにする。具体的には、モデルの音声を聞いて復唱する条件（リピート条件）、イラストを見てその語を自律的に発音する条件（イラスト条件）、単語の綴りを見てそれを音声で発音する条件（スペリング条件）の3つの条件を設定し、それぞれの条件下で、日本人英語学習者にとって習得が難しいと思われる4つの音声要素を含む語（カタカナ語とアクセント位置が異なる語、カタカナ語と音節数が異なる語、日本語にない単母音 /æ/ を含む語、長音化しやすい二重母音 /ei/ や /ou/ を含む語）がどの程度正確に発音できるかどうかを調査する。加えて、この3条件において、発音の正確さが左右されるかどうかを明らかにする。そうすることで、教室でよく行われているリピージングの指導の効果と限界を明らかにするとともに、綴りによる音声への干渉について考察する。研究課題は以下の4点である。

- RQ 1. 4つの音声要素は、モデル音声を聞いてそれを復唱する場合（リピート条件）、どの程度正しく発音できるか。
- RQ 2. 4つの音声要素は、イラストを見て自分で英単語を発音する場合（イラスト条件）、どの程度正しく発音できるか。
- RQ 3. 4つの音声要素は、単語の綴りを見てそれを発音する場合（スペリング条件）、どの程度正しく発音できるか。
- RQ 4. 上記3つの条件によって、4つの音声要素の発音の正確さが左右されるか。

#### 3.2 対象

本調査の対象としたのは、小学校5年生33名であった。ただし、分析に際して、全3回のデータ収集において1度でも欠席したり、データの録音に不備があったりしたものを除いたため、分析対象としたのは26名分のデータである。

対象児童は、小学校第1学年の段階から、ゲームや本の読み聞かせなどの体験的な活動によって身近な英語に慣れ親しんできている。授業では、友達やALTだけでなく、台湾の学生と実際にコミュニケーションを図るなど、目的や相手を考えながら学んだ英語を使う学びを経験してきており、英語でコミュニケーションを図ることに対して概ね意欲的である。

とりわけ音声の知識や技能については、学年に応じてチャンツや歌、ゲームなどを活用しながら、繰り返し単語や表現を扱うことで定着を図ってきた。指導に際しては、大きな声で発音することに加えて、アクセントやリズムに注意しながら外来語と英語を比較したり、日本語と英語の音声の違

いに気付かせたりするなど、なるべく教え込みにならないような配慮を行っている。一方で、やり取り等の場面では、英語の発音がカタカナ読みになることがあったり、伝えたい内容を相手に十分に伝えられないこともあるという状況である。また、文字の指導については、大文字と小文字の名称読みと形の指導を第3学年から導入し、学校などの身近なところにあるアルファベットを探したりするなど、楽しみながら文字の形に慣れ親しむことを行ってきた。その一方で、フォニックスなどを用いた文字と音を関連づける指導や、単語を読む活動は、これまで十分に行っていない。

### 3.3 材料

今回の調査で取り扱う言語材料として、小学校英語教科書 (*We can! 1, 2*) から、2.2 で述べた日本人英語学習者にとって習得が難しいと思われる4つの音声要素を含む単語 (カタカナ語とアクセント位置が異なる語、カタカナ語と音節数が異なる語、単母音 /æ/ を含む語、二重母音 /ei/ や /ou/ を含む語) を、それぞれ6語ずつ抽出した。語彙の選択においては、小学校5年生の対象者らに十分馴染みがある語であること、またそれらの語がイラストを見て自律的に想起されやすいものであることに配慮した。具体的な音声要素と語彙は表1の通りである。

表1 言語材料一覧

音声要素	定義	語彙
アクセント	カタカナ語とアクセントの位置が異なる語	banana, guitar, piano, gorilla, koala, orange
音節	カタカナ語と音節数が異なる語	spring, friend, black, classroom, science, strawberry
単母音	強勢が置かれる /æ/ を含む語	apple, bag, cap, cat, hand, dance
二重母音	強勢が置かれる /ei/ /ou/ を含む語	homework, nose, snow, cake, snake, grapes

これらの語について、順序効果を相殺しながらすべての語を3つの条件下で発音させるため、3つのテストセットを作成した。1つのセットでは、各音声要素の異なる2語を、リピート条件、イラスト条件、スペリング条件で発音させることとした。すなわち、テストAでは、banana, guitar, spring, friend, apple, bag, homework, nose の8語をリピート条件で、piano, gorilla, black, classroom, cap, cat, snow, cake の8語をイラスト条件で、そして koala, orange, science, strawberry, hand, dance, snake, grapes の8語をスペリング条件で発音させるようにした。実際に使用したテスト用紙は Appendix を参照されたい。

### 3.4 手続き

#### (1) データの収集

データの収集は、2020年9月から10月にかけて、児童らの教室で一斉に行った。なお、児童の負担を軽減するため、テストは3回に分けて行った。

初回の実施に際して、児童らに、収集する音声データは匿名化されて集計されること、個人の名前が分かるような形で音声が開示されることはないこと、そして成績評価等には関係しないことを口頭で伝え、協力への了解を得た。録音用のタブレットを配布し、録音のための操作方法等を確認させた上で、テストセットを配布し、設問ごとに教師の指示に従って、個別に録音をさせた。なお、リピート条件でのモデル音声は、事前に作成した音声ファイルを教室で流すことで実施した。

#### (2) データの分析

録音された音声ファイルを取りまとめ、2名の評価者が独立して採点を行った。その際には、当該の音声要素のみを対象として、それが正確に発音されているかどうかを0/1で採点した。たとえば音節数の正確さを測る語彙である *strawberry* については、2音節で発音できているか否かのみを評価対象とし、たとえば /r/ の発音の正確さなどについては考慮しなかった。また、無回答や「分かりません」といった回答については誤答と判断し0点として処理した。2名の評定者の判断が異なった項目については、協議によって判断を下した。

個人の音声要素ごとの得点を集計した上で、各条件下での正答数を検討した。また、条件と音声要素の交互作用を確認するため、二元配置分散分析（発音条件3水準×音声要素4水準）によってその差を検討した。集計には Microsoft Excel 2016 を、分析には IBM SPSS Statistics 26 を用いた。

## 4. 結果と考察

### 4.1 結果の概要

表2に記述統計量を示す。3つの条件下における4つの音声要素が正確に発音できるかどうかについて検討するため、平均正解回答数（各6点満点）について、二元配置の分散分析（発音条件3水準×音声要素4水準）を行った。

表2 発音条件ごとにみた各音声要素の正解回答数 ( $n = 26$ )

発音条件	音声要素							
	アクセント		音節		単母音		二重母音	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
リピート	5.81	0.40	5.88	0.33	5.65	0.63	5.15	0.88
イラスト	4.77	0.99	3.85	1.46	4.92	1.06	3.85	1.41
スペリング	3.15	2.05	2.42	2.30	3.15	2.13	2.77	1.97

その結果、発音条件の主効果 ( $F(1.23, 30.83) = 50.86, p < .001, \eta_p^2 = .67$ ) および音声要素の主効果 ( $F(3, 75) = 10.03, p < .001, \eta_p^2 = .29$ ) が有意であり、また発音条件と音声要素の交互作用も有意であった ( $F(4.49, 112.24) = 4.24, p = .002, \eta_p^2 = .15$ )。

#### 4.2 各音声要素をどの程度正確に発音できるか

RQ1、RQ2、RQ3 を検討するため、3 つの発音条件それぞれにおける音声要素の単純主効果を検討した。その結果、リピート条件 ( $F(2.24, 55.93) = 8.64, p < .001, \eta_p^2 = .26$ )、イラスト条件 ( $F(3, 75) = 9.17, p < .001, \eta_p^2 = .27$ )、スペリング条件 ( $F(3, 75) = 3.39, p = .02, \eta_p^2 = .12$ ) のいずれにおいても、音声要素の単純主効果が有意であった。

Sidak の方法による多重比較を行った結果、リピート条件においては音節と二重母音、アクセントと二重母音の間で、いずれも二重母音の正解数が有意に低かった。スペリング条件においては、単母音とアクセントの間、音節と二重母音の間に有意な差がなく、単母音・アクセントと音節・二重母音の間に有意な差がみられた。すなわち、音節や二重母音に比べて、単母音とアクセントの正解数が有意に高いという結果であった。スペリング条件においては、いずれの組み合わせの間においても有意な差がみられなかった。

#### 4.3 発音条件によって各音声要素の正確さに違いがあるか

RQ4 を検討するため、4 つの音声要素それぞれにおける発音条件の単純主効果を検討した。その結果、どの音声要素についても、発音条件の単純主効果が有意であった (アクセント :  $F(1.45, 26.13) = 35.41, p < .001, \eta_p^2 = .59$ ; 音節 :  $F(1.62, 40.52) = 43.12, p < .001, \eta_p^2 = .63$ ; 単母音 :  $F(1.21, 30.26) = 27.51, p < .001, \eta_p^2 = .52$ ; 二重母音 :  $F(2, 50) = 32.80, p < .001, \eta_p^2 = .57$ )。Sidak の方法による多重比較の結果、同じくすべての音声要素において、リピート条件 > イラスト条件 > スペリング条件の順で、正解回答数に有意な差がみられた。

#### 4.4 考察

上述の結果を踏まえ、本節では、各研究課題について考察を行う。まず RQ 1 のモデル音声を聞いてそれを復唱する場合 (リピート条件) では、すべての音声要素の正答数が 5 点を越えており、どの音声要素もある程度正確に発音ができるようであった。ただし、二重母音を含む語については、アクセント位置や音節数がカタカナ語と異なる語に比べてやや正確さを欠くことがあるようであった。このことから、二重母音を含む語については、モデルを聞いたときにカタカナの長音との区別がついておらず、聞き分けて認識することができていない可能性があると言える。

RQ2 のイラストを見て自分で英単語を発音する場合 (イラスト条件) においては、強勢の位置がカタカナ語と異なる語と単母音 /æ/ を含む語に比べて、音節数がカタカナ語と異なる語や二重母音を含む語を正確に発音することが難しいようであった。自律的な発音ができるという意味では、日



本語のア音と異なる母音 /æ/ の音や、カタカナ語と異なるアクセント位置については、ある程度定着していると言えるが、その一方で、音節数がカタカナ語と異なる語や二重母音を含む語については十分に定着していないようである。相対的に見れば、これらの要素が母語の干渉を受けやすいと言えるだろう。

RQ3 の単語の綴りを見て発音する場合には、全体的に正解回答数がやや低く、また音声要素の間に有意な差は見られなかった。これは、平均正解数のばらつきが大きいことが影響していると思われる。児童によっては、綴りから単語を想起できず、ほとんどの単語を無回答としたり、あるいは間違った語を想起（例えば gorilla を goal と認識するなど）して発音したりすることで、誤答数が増えたようであった。そのため、綴りから単語を認識する段階での問題と、綴りが発音に与える影響を切り分けて考察することが難しい。この点については、今後の検討課題としたい。

RQ4 の発音条件間の違いについては、いずれの音声要素についても、リピート条件、イラスト条件、スペリング条件の順で正解回答数に差があった。つまり、モデル音声を聞いた直後に復唱することはできたとしても、それは必ずしも自律的に正しい発音を産出できるとは限らないことを示唆している。先の RQ1 と RQ2 の結果を踏まえると、とりわけカタカナ語と音節数が異なる語（spring など）や二重母音を含む語（homework など）については、モデルの復唱であればほとんど正しい発音ができるのにも関わらず、モデルがない場合にはその正確さが失われやすい。これは、英語と日本語の音声の違いについて気づいてはいる（認識でき、構音できる）ものの、個々の単語の知識とつながっていない（カタカナ読みで単語を覚えている）ことを示唆している。

また、リピート条件やイラスト条件に比べて、スペリング条件の正解回答数が低いことから、たとえ知っている語（イラストを見ながら自律的に音声を産出できる語）であっても、綴りを見て単語を想起すること、またそれを正しく発音することが難しいようであった。これは、アルファベットの文字が発音に干渉するというよりは、文字を見て単語を想起できないことが主たる原因であると思われるが、先に述べた通り、今回の実験デザインでは十分に切り分けて論じることができないため、今後の課題として指摘するに留めたい。

## 5. おわりに

本研究によって、日本人英語学習者にとって習得が難しいと思われる4つの音声要素について、小学校5年生の段階でどの程度身に付いているのかの一端が明らかとなった。とりわけ、モデル音声を聞いて復唱するときには正しい発音ができる単語であっても、イラストを見て自律的に発音したり、あるいは綴りを見てそれを発音したりする際には、その正確さが失われる可能性があることを実証的に明らかにしたという点は、今後の音声指導における示唆を含んでいる。例えば、教室で単語をリピートさせる際には、教師がポイントをあらかじめ伝えたり、日本語と英語の音声の違いに気付かせたりするなどのメタ認知的な方法を採用することも必要であろう。また、モデルを提示してから発音させるのではなく、まずは児童に発音させてからモデル音声を聞かせて、自身の発音との

違いを考えさせたり、友だち同士で発音の違いを話し合わせたりするなどの気付きを高める工夫もできるだろう。

また、今回取り上げた音声要素の中では、特に二重母音の音声認識についての難しさが際立つようであった。二重母音はリピート条件下においても正確さが下がりやすいことから、まずは、日本語と英語の音の違いを比較・強調しながら練習することが有効である。例えば、「グレープ」と“grapes”を交互にゆっくりと発音し、「レー」と /rei/ の発音の違いを認識させることや、口の動きをよく観察させ、動きに気をつけながら発音の練習をさせることで、長母音と二重母音の音と発声方法の違いへの気づきを促すことができるだろう。

さらに、児童にとって文字を読むことは、予想以上に難しいということも付記しておきたい。今回取り上げた単語はどれも動物や果物などの身近な英語であり、イラストを見て発音することができるものばかりであったが、それが文字と結びついているとは言い難い結果であった。児童らは第1学年時から英語学習を開始し、また指導の中でもイラストの下に文字を入れたピクチャーカードを用いるなど、文字に触れる機会は多くあった。また、大文字や小文字を読んだり書いたりすることも、既にある程度定着している。しかし、文字と音を結びつけるためには、こうした文字への慣れ親しみに加えて、発音と綴りの関係や特徴への気付きを促す指導法を検討する必要がある。例えば、綴りを見て発音する練習をする際、綴りを少しずつ提示しながら段階を追って発音させる (g, gr, grape, grapes など) ことで、音声と綴りの関係の気付きを促すなどの方法が考えられる。

## 参考文献

- 赤塚麻里・山見由紀子 (2016) 「日本人小学生における英語の発音と国際的理解度の一考察 —語頭子音に焦点をあてて—」『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』12, 51-61.
- 赤塚麻里・山見由紀子 (2017) 「日本人大学生を対象とした音素認識の難易調査」『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』13, 83-95.
- 市崎一章 (2009) 「小学校英語教育への提言」『英語音声学』13, 457-471.
- 大井恭子 (2009) 「データから見る英語学習入門期における書く力 —独自到達度テストの結果分析—」『千葉大学教育学部研究紀要』57, 31-42.
- 窪菌晴夫 (1998) 『音声学・音韻論』東京: くろしお出版.
- 窪菌晴夫・本間猛 (2002) 『音節とモーラ』東京: 研究社.
- 窪菌晴夫・溝越彰 (1991) 『英語の発音と英詩の韻律』東京: 英潮社.
- 佐久間康之・高木修一 (2019) 「小学6年生の言語性短期記憶における音韻認識と音声産出の特徴」『小学校英語教育学会誌』19, 146-161.
- 高木修一・佐久間康之 (2017) 「英語リスニング熟達度の違いによる児童の音韻認識 —Children's Test of Nonword Repetition を用いて—」『福島大学人間発達文化学類論集』26, 13-21.
- 高桑光徳 (2012) 「日本語長音の学習と英語二重母音の習得との関連性」『明治学院大学教養教育セ

ンター紀要カルチュラル』6(1), 155-168.

文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 解説 外国語活動・外国語編』 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_011.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf)

和田あずさ (2015) 「義務教育段階における英語音声指導の現状と課題 — 『カタカナ英語』に着目して—」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 55, 417-424.

和田あずさ (2016) 「小学校外国語教育における音声指導目標の検討」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 56, 330-350.

## Appendix: テスト用紙の一例

今から、いろいろな英語を発音して、それを録音してもらいます。これは、小学 5 年生のみなさんが今の時点でどのくらい上手に英語を発音することができるかを調べるためのものです。個人の名前が分からないように集計します。録音した音声がそのまま公開されることはありません。また、成績には関係ありませんので、まちがえても気にせず、安心して取り組んでください。


クラス \_\_\_\_\_ 名前 \_\_\_\_\_

1. モデルの音声につづいて、同じように単語を発音してください。  
(練習)


(1)            (2)            (3)            (4)

(5)            (6)            (7)            (8)


2. 次のイラストを見て、それを英語で言ってください。  
練習




1




2




3




4




5




6



7



8



3. 次の単語を声に出して読んでください。  
(練習) book

(1) banana    (2) guitar    (3) spring    (4) classroom

(5) apple    (6) bag    (7) cake    (8) homework

これでテストはおしまいです。ご協力ありがとうございました。